

日本聖公会 川越基督教会

## 資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

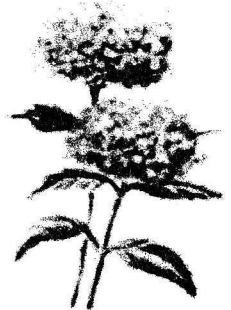
第 4 号

(2017年6月)

一昨年夏より始めた資料整理も、スキャン作業の一部を残しほぼ終了段階に入りました。完成された目録、スキャン画面等の見直しを行っています。これら作業が完全に終わりましたら、資料検索等の実演会も予定しています。その後別倉庫に保管されていた第2資料の整理も待たれています。

資料保管委員会では、こうした作業の他に、教会史に関わる諸施設の見学会、「聖公会史談会」その他講演会にも出席を計画しています。

委員会の中でも随時学習会開催を予定、7月には山本元委員による「初雁幼稚園・私立川越女学校の設立場所の変遷について」も実施いたします。



過日5月17日に宮代町コミュニティセンターで開催された「法とアーカイブス—公文書・古文書の中の権利」と題された講演会に、資料委員会の松川秀人兄が出席されました。「国際アーカイブスの日」に開催されたこの会には、地域資料保存に関わる方々が集い、資料保存に関する法律的諸問題について学ぶ機会となりました。

私たちの教会の創立者、田井正一先生は1848年(嘉永元年)のお生まれ。明年が生誕170年の記念の年になります。市内三久保町には、先生の曾孫にあたる田井欽一、満喜子さんご夫妻がお住まいです。お宅にある先生の肖像画をこの程教会員の松村信兄に撮影していただきました。先生のお姿が教会に飾られる日もまもなくです。



今号は先に洋行された、資料委員会メンバーのドウエル・ベリー兄、山口みどり姉の旅行記を掲載しました。それぞれ聖公会関係施設の訪問の様子が記された興味ある文章です。お読みください。

2017年4月23日、礼拝後の昼食の後で、著者の故郷にあるアメリカ聖公会の教会について紹介しました。川越キリスト教会の歴史資料を整理する中で、設立者である田井正一師のアメリカ観察の記事が刺激になり、復活祭への参加を計画したのです。田井師の明治28(1895)年から明治30(1897)年までの訪問目的の1つは、「キリスト教はアメリカの社会でどんな役目があるのか」を観察することでした。それにより幅広い地域の聖公会の教会訪問もできました。その頃からもう120年もの月日が経ちました。

著者の故郷はアメリカの西海岸にあるオレゴン州セーレム市で、現在、川越市の海外姉妹・友好都市の1つです。幼い頃からジェイソン・リー・メソジスト教会(Jason Lee Methodist Church)へ通いました。けれども、1昨年前の復活祭の時、娘と2人で聖公会(川越)へ入りましたので、今年の復活祭は故郷の聖パウロ聖公会教会(St. Paul's Episcopal Church)で祝ってみたいと思いました。同教会への訪問は初めてです。

出発する前に教会へ連絡し、復活祭参加の気持ちを知らせました。また、資料保管担当とのアポイントもとりました。そのこともあって、復活祭当日、知り合いはまだ1人もいなくても、皆に歓迎されました。礼拝後のコーヒブレイクにも参加し、信徒の方たちと話もできました。

特に期待していたのは資料保管担当リチャード・バン・オルマン氏(Richard Van Orman)に会うことでした。1人で教会の資料を整理、保管しているだけではなく、オレゴン教区の資料保管も1人で担当しています。同教区は太平洋に面しているオレゴン州の西3分の1(北海道と四国位の広さ)で、70ほどの教会があり、信徒総数は1万5千人もいます。リチャードさんによると、毎年教区内の教会は2つほど閉鎖されるそうです。信徒減少が主な理由のようです。資料保管状況についても細かく説明を聞かさせていただき、聖パウロ聖公会教会の150年史などの貴重な資料もいただきました。川越キリスト教会の英語版のパンフレットもリチャードさんたちへ配りまして、皆に興味を持っていただくことができました。

同教会は社会でも活躍し、難民への英語教育やホームレス、ワーキングプアなどの方々への食料配りや生活指導を実施し、社会的弱者への偏見を減らす働きなどに力を出していることがわかりました。宗派と関係なく、他の教会と組み、社会活動を実施することも多いようです。

川越の皆さんも、田井師のアメリカ訪問を思い起こしながら、日本国内でも聖公会などの教会訪問を試みてはいかがでしょうか。その地域でどんな役割を果たしているのか、ということを観察することは、川越での活動の参考になるかもしれません。

セーレム市を含み、川越市は6つの国内外の姉妹・友好都市と提携を結んでいます。宗教とは無関係な交流を実施していますが、行き先にある教会訪問の有無は各自の自由です。それらの姉妹・友好都市の周辺に、聖公会などの教会もあります。セーレム市の他、海外にある街は、ドイツのオッフエンバッハ市やフランスのオータン市があります。

国内の姉妹・友好都市周辺の聖公会は、福島県棚倉町の近くに郡山聖ペテロ聖パウロ教会があり、明治36(1903)年にできました。セントポール幼稚園もあります。福井県小浜市は小浜聖ルカ教会があり、明治30(1897)年の煉瓦造・木造の礼拝堂が川越と同様、文化庁の登録有形文化財(建造物)になっており、聖ルカ幼稚園もあります。北海道の中札内村は近くに帯広聖公会があり、明治28(1895)年にできて、帯広聖公会幼稚園もあります。狭山市出身の方であれば、そちらの姉妹・友好都市交流先もあります。

最後になりましたが、4月23日当日は、私が幼い頃から通っていたジェイソン・リー・メソジスト教会が偶然に閉鎖された日でした。原因は信徒減少や活気減少などです。社会弱者のためにも長年力を尽くした教会でした。けれども、そのような不幸な境遇に差す光明もあります。1つ目は、閉鎖する前に、教区の資料保管担当に連絡し、責任者が教会の明治43(1910)年設立以降の資料を無事に片付けたので、以後は教区が整理し、保管することになりました。2つ目は、今まで予算の少ない2つの少数民族の教会が、ジェイソン・リー・メソジスト教会の空いている日時を利用して長年教会を使用してきましたが、今後もメソジスト教区から継続利用の許可がおりたことです。



著者の故郷アメリカのオレゴン州セーレム市は天保13（1842）年設立。イラストは明治9（1876）年の様子。その頃、セーレム市にある母校のウィラメット大学（現東京国際大学の姉妹校）で日本人1人が留学。西海岸に大学はまだわずかの頃。Library of Congress 蔵

アメリカ聖公会、聖パウロ教会、セーレム市にて。  
2017年4月15日



アメリカ聖公会、聖パウロ教会、セーレム市にて。  
子供の復活祭の卵探し。2017年4月16日

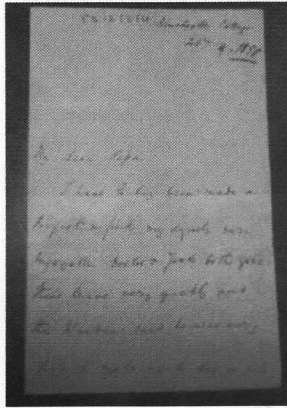


アメリカ聖公会、聖パウロ教会、セーレム市にて。  
復活祭、楽団や聖歌隊によるメサイア（ヘンデル作）が演奏された。2017年4月16日



アメリカ聖公会、聖パウロ教会隣の歴史公園でチューリップも復活祭を迎える。セーレム市にて。2017年4月16日

3月2日から2週間あまり、私は二つの目的をもってイギリスを訪問しました。一つ目はある一族に関する文書の収集です。約20年前、私は留学先の大学院で19世紀の国教会聖職者の娘たちというテーマで博士論文を書いていた。このとき、地域の文書館で出会ったのが土地の旧家ブラムストーン家・ルアード家の家族文書です。ここには国教会聖職者ジョン・ブラム



トラント・ブラムストーンから家族への手紙。監督生に選ばれたことを報告している。(1858年)

トン師を中心にその妻子、さらに近隣の牧師ルアード師に嫁いだ長女クララー家の日記や大量の書簡、覚書、スケッチ、写真、家族に関する新聞の切り抜き、果ては子どもたちの落書きや学校の教科書、成績表まで収められていました。日本ではなかなか考えられないことですが、イギリスの地方の文書館には、このような家族文書が多数みられ、社会史研究の重要な史料となっているのです。(個人情報満載の史料ですので、寄贈後も、一定期間は非公開にするなどの決まりがあります。)少女の日記や家族間の書簡からは、当時の人々の生き生きとした暮らしが蘇ります。2001年に提出した博士論文では、終章がこの一族を例にケース・スタディだったのですが、数年前、クララーの曾孫にあたる女性から突然メールをいただきました。驚いたことに、どこからか論文

が子孫の手に渡り、一族の間で回覧されているというのです。これを機に、歴史をまたいで一族の子孫との交流も始まりました。

さて、田舎牧師だったブラムストーン師は、首相グラッドストーンに見出されて大出世し、ウィンチェスター大聖堂の首席司祭になります。また、息子トラントはそれに先立ちウィンチェスターにある名門寄宿学校に進学しており、後年は教員として同校に戻りました。そこで今回はいつもの資料館のほかに古都ウィンチェスターにも足を延ばし、ウィンチェスターにあるブラムストーン家の史料を調べてみることにしました。

ウィンチェスター・カレッジは大聖堂のすぐ裏手に位置する堂々たる石造りの学校で、創立は何と1382年。イギリス最古の男子中等学校です。歴史ある学校ですので、調査や閲覧希望も多いのでしょう。複数の専門スタッフが史料の管理や調査を行っていました。訪問時には、肖像画や古い書物が並ぶ厳しい閲覧室の大きな机にトラントの在学中の日記、家族からの手紙類、学校誌、課外活動で行っていたグリークラブの記録、やはり卒業生であったジョン・ブラ



ベロウ夫妻。妻のジェインさんは女性司祭でした。

ムストーン師の書簡等、多数の史料が並べられていました。これまで研究してきた姉クララー家と同様、トラントも面白い研究対象になりそうです。滞在中は、学校から車で30分ほどの場所にあるトラントの曾孫ベロウ夫妻宅に泊めていただきました。一族との繋がりが、また深まりました。

ふたつ目の目的は、合同福音伝道協会（USPG）での女性宣教師の史料の収集でした。これは昨年新しく始めた共同研究の一環で、日本、韓国、中国、インドネシア、エジプトの近代史研究者と、欧米からアジア各国に伝播した「新しい女性」現象を比較研究しているものです。川越基督教会にきたアメリカ人宣教師のミス・ヘイウッドやミス・アプタンもそうでしたが、イギリスの聖公会（国教会）からアジアに派遣された女性宣教師も、多くは大卒の教師や医師、いわゆる「新しい女性」でした。経済的にも——そしてしばしば性的にも——自立した「新しい女性」は、イギリス国内では不安視される存在でもあったのですが、女性宣教師となればお堅い国教会「お墨付き」の女性たちであるはずです。国教会はどのような観点でどういう女性を選んだのか、誰をどこに送ろうとしたのか。国教会の宣教戦略を知りたいと思いました。今では同協会の文書のかかなりの部分が有料オンライン・データ集に収められており、自宅から閲覧することもできます。ですがこうした情報は、そこには所収されていません。そこで、19世紀末から20世紀初頭に東京、朝鮮、インドに派遣された約140名の女性宣教師の応募や選考に関わる個人資料にあたりました。

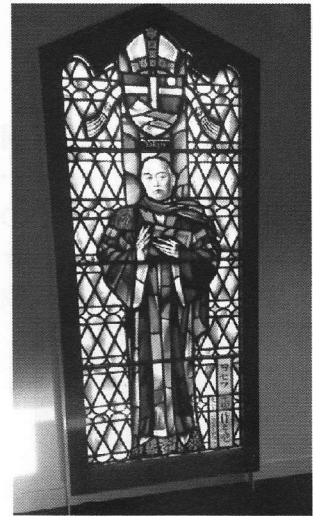
実はUSPGを訪れるのは、約20年ぶり。昔と変わらぬ笑顔で迎えてくれた学芸員のキャサリンさんが、新しくできた資料庫に案内してくれました。資料庫のあるビルはサザーク大聖堂の近くで、USPG本部から15分ほどの距離だったでしょうか。途中には、不思議な場所もありました。道端の柵におびたらしい数のリボンやメッセージが結びつけられているのです。キャサリンさんによると、そこはクロス・ボーンズと呼ばれる墓地跡で、かつて教会墓地への埋葬が許されなかった娼婦を葬っていた場所だったとか。調べてみると、その後



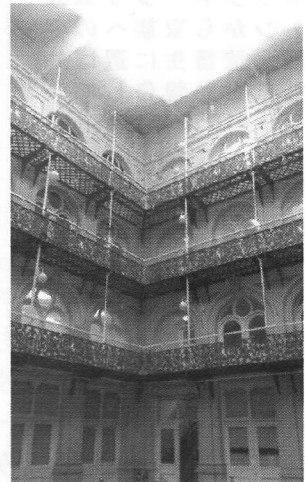
墓地跡の柵に結びつけられたたくさんの祈り。

もこの地は恵まれない人々の埋葬の場だったようですが、1853年に閉鎖。その後は人々から忘れ去られました。それが1990年代に地下鉄工事に伴う調査で大量の人骨が発掘されたことで、一躍話題になったのです。今では、不遇のうちに生涯を閉じた女性たちに思いを馳せる祈りの場となっています。

新たな出会いと再会、そして発見に満ちた旅から3か月。ショッキングなニュースが届きました。USPG資料庫に隣接する「バラ市場」が過激派テロの現場となったのです。幸いキャサリンさんや周囲の方々は無事だということでしたが、人々の偏見と対立が生み続ける惨事に胸が痛みます。



USPG本部に飾られた元田作之進主教のステンドグラス。かつてはUSPGのチャペルにあった4名の「現地人」主教のステンドグラスのひとつ。



新しい資料庫は昔の「ホップ取引所」の地下にありました。